

2022 年 11 月

食料安全保障月報

(第 17 号)



令和 4 年 11 月 30 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報(生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等)について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2022年11月食料安全保障月報（第17号）

目次

概要編

I	2022年11月の主な動き	1
II	2022年11月の穀物等の国際価格の動向	4
III	2022/23年度の穀物需給（予測）のポイント	4
IV	2022/23年度の油糧種子需給（予測）のポイント	4
V	今月の注目情報「今後の世界の生産・貿易動向を左右するブラジル」	5

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	8
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	9
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	10
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	12
5	食品小売価格の動向	16
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）	17
7	FAO食料価格指数	19

品目別需給編

I 穀物

1	小麦	1
	＜米国＞ 2023/24年度の冬小麦の発芽進捗率は5年平均並の81%	
	＜カナダ＞ 生産量は回復し、過去5年平均比14.3%増、品質は良好の見込み	
	＜豪州＞ 生産量は前月予測から1.5百万トン上方修正され、史上2番目の34.5百万トン	
	＜EU27+英国＞ 2023/24年度の冬小麦の生育状況は大部分のEU諸国で良好	
	＜中国＞ 2022/23年度の小麦生産量は、史上第1位の138百万トン	
	＜ロシア＞ 生産量は史上最高の91.0百万トン	
	＜ウクライナ＞ 2023/24年度の冬小麦の播種進捗率は91.3%（11月7日時点）	
2	とうもろこし	9
	＜米国＞ 生産量は収穫面積・単収減少により減産、輸出減の見通し	
	＜ブラジル＞ 生産量は史上最高、輸出増の見通し	
	＜アルゼンチン＞ 生産量は史上最高、輸出増の見通し（輸出税継続）	
	＜中国＞ 生産量、消費量ともに史上最高、輸入量減少の見通し	
	＜ウクライナ＞ ロシアによる侵攻により、輸出量は前年度より4割減	
3	コメ	15
	＜米国＞ 生産量減少により長粒種の価格が更に上昇	
	＜インド＞ モンスーン終了の遅れによりカリフ米の収穫に遅れ	

- <中国> 一期作の収穫は終了、二期作も収穫期を迎えている
- <タイ> 2022/23 年度の生産量・輸出量は増加見通し
- <ベトナム> インドの輸出規制による代替需要増で輸出価格が更に上昇

II 油糧種子

- 大豆・・ 2 1
- <米国> 生産量は減産、輸出減の見通し
- <ブラジル> 生産量は史上最高、輸出量も史上最高の見通し
- <アルゼンチン> 生産量は史上最高、輸出量前年度比 2.5 倍（輸出税継続）
- <中国> 増産見通し、消費量・輸入量も増加見通し
- <カナダ> 収穫面積は減少も、単収の増加により増産、輸出量も増加見通し

- (参考 1) 本レポートに使用されている各国の穀物年度について(2022/23 年度)・・・ 2 7
- (参考 2) 単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 7

特別分析トピック

「我が国と世界の農業機械をめぐる動向」

【利用上の注意】

表紙写真：ブラジル・パラナ州の大豆圃場（11 月 8 日撮影）

10 月 16 日に作付され、作付当初からまとまった雨が記録されたため、現在の作柄は良好。

(概要編)

I 2022年11月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の2022/23年度の作況については、北半球の収穫がほぼ終了し、南米では作付けから生育期を迎えている。

品目別にみると、11月の米国農務省（USDA）の需給報告では、小麦については、世界の生産量が前年度より増加する見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、3月には過去最高を更新した国際相場も侵攻前の水準まで戻しているが、高水準で推移している。11月19日に期限を迎えたウクライナの穀物輸出に関する4者合意は120日間（2023年3月19日）延長されたものの、今後も注視が必要。

とうもろこしについては、世界の生産量が米国や欧州の乾燥等の影響により前年度より減少する見通し。一方、大豆については、前年度乾燥で減産となった南米を中心に世界で増産となる見通し。いずれの品目も期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視する必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数（最新値：10月）については、9月から概ね横ばいで推移（136.0→135.9）しているものの、引き続き高い水準を維持（参考：前年10月の値は133.2、前々年10月の値は101.4）。

海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が昨年10月に、2008年のリーマン・ショック後の最高値を記録したものの、本年10月は、その最高値から7割程低下し、直近5カ年の平均値とほぼ同水準で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021年7月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、11月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

ウクライナ農業政策食料省の11月11日報告によると、2022/23年度の冬小麦は収穫が終了し、1,940万トン収穫された。とうもろこし等の夏作物も収穫が開始され、計画の39%に当たる960万トンが収穫された。

2023/24年度の冬小麦の作付けは、11月8日報告によると計画の91%に当たる364万ヘクタールが終了した。

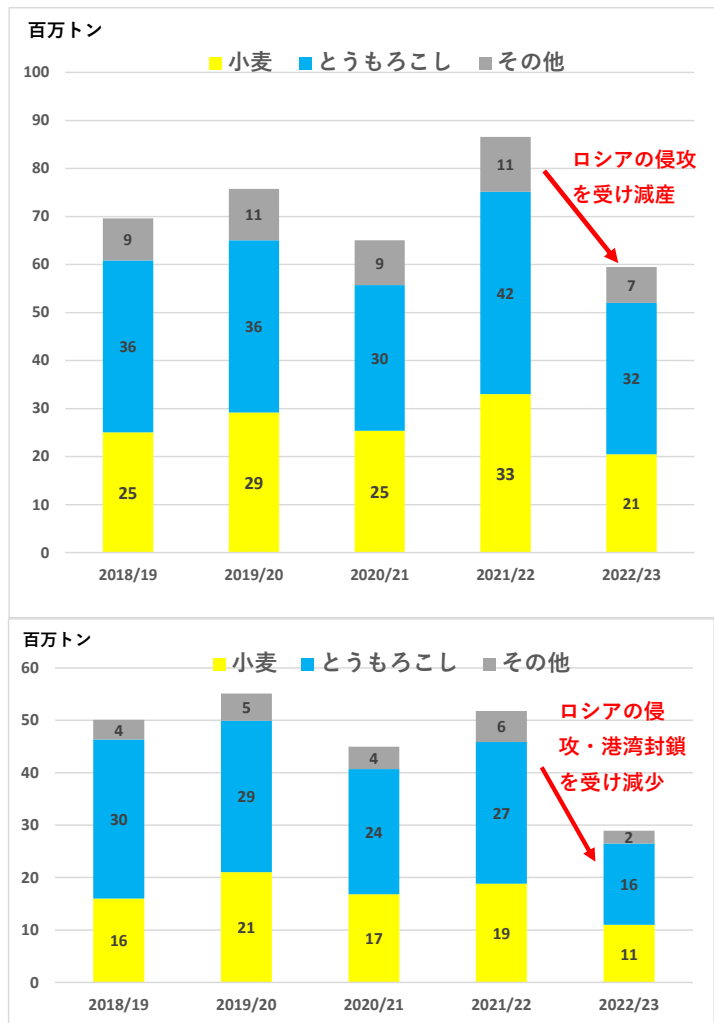
7月22日の国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意を受け、8月以降、オデーサ港等3港からの輸出が再開されており、10月31日時点で、輸出量は約973万ト（うち、とうもろこし419万ト、小麦276万ト他）。目的地はスペイン、トルコ、イタリア、中国等。

11月17日には、ウクライナの穀物輸出について、11月19日から120日間（2023年3月19日まで）延長することで合意した。

米国農務省（USDA）の11月見通しによれば、2022/23年度の小麦の生産量、輸出量は、それぞれ前月見通しから変更はなく2,050万トン（対前年度比38%減）、1,100万トン（同42%減）の見通し。

一方、とうもろこしの生産量、輸出量は、それぞれ前月見通しから変更はなく3,150万トン（同25%減）、1,550万トン（同43%減）の見通し。

(参考)ウクライナの小麦ととうもろこしの生産量(上)、輸出量(下)の推移



出典：米国農務省 「PS&D」 (2022.11)

1 米国のとうもろこし、大豆は夏季の乾燥で減産見通し

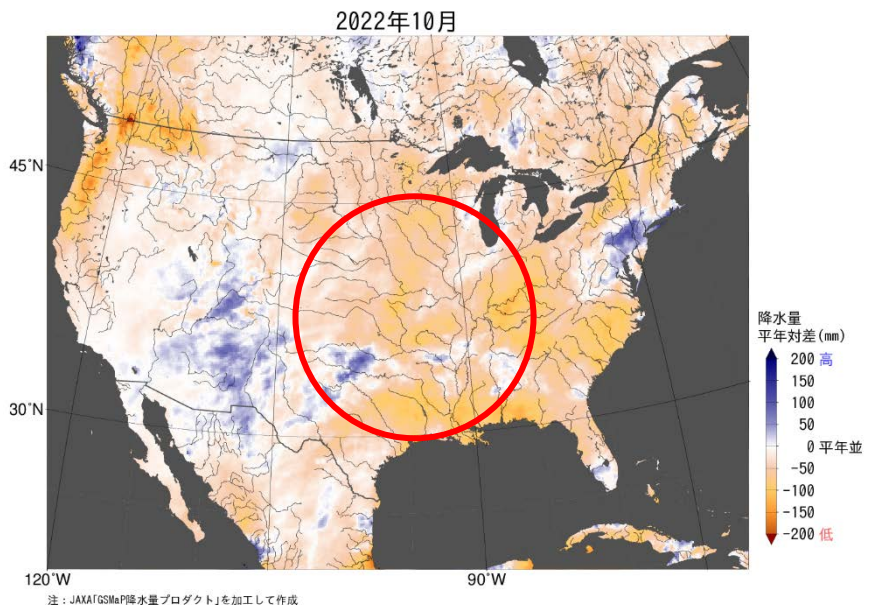
米国のとうもろこし、大豆は11月中旬でおおむね収穫が終了した。米国農務省の11月見通しで、生産量は前月と比較してわずかに上方修正はされたものの、夏季のコーンベルトの一部での高温乾燥の影響から、とうもろこしは対前年度比8%減の3億5,380万トン、大豆は対前年度比3%減の1億1,830万トンが見込まれている。

この結果、輸出量は、とうもろこしは前年度比13%減の5,460万トン、大豆は前年度比5%減の5,570万トンが見込まれている。

なお、期末在庫率は、とうもろこし8.3%、大豆5.0%と低水準となっている。

一方、ミシシッピ川流域の降雨不足により、10月の水位が1927年の観測開始以来の最低水準となるなど、はしけ運送にも一部支障が出ており、10月のはしけ運賃が前年の3倍程度に上昇した。今後の動向に注視が必要である。

米国。特にミシシッピ流域の10月の降水量は平年より少ない



2 豪州の冬穀物・油糧種子は3年連続豊作見通し

豪州は11月以降冬作物の収穫が開始される見通し。USDAの11月見通しによれば、豪州の小麦の生産見通しは天候に恵まれ、前月見通しから150万トン上方修正され、3,450万トンと過去最高の豊作となった前年度に迫る見通し。大麦の生産見通しは1,270万トンと3年連続で高水準となり、菜種は730万トンと史上最高を更新する見通し。

特に、ウェスタンオーストラリア州においては、天候に恵まれ、GIWA（ウェスタンオーストラリア州穀物団体）の見通しによれば、小麦1,260万トン（前年度1,289万トン）、大麦615万トン（同837万トン）、菜種398万トン（同313万トン）と見込まれており、小麦、大麦は前年度に迫り、菜種は史上最高を更新する見通し。

3 パキスタンの洪水でコメ生産量は減少の見通し

USDAによれば、パキスタンは、南部のシンド州を中心に、洪水による影響からコメの生産見通しが3か月連続で下方修正され、前年度比28%減の660万トンとなる見通し。

輸出量は、生産減に伴い、400万トンと前年度比17%減が見込まれている。

II 2022年11月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、10月末、320ドル/トン台半ばで推移。11月に入り、10月29日にロシアがウクライナ産の黒海経由での輸出合意を無期限で停止すると一方的に表明したことにより、11月当初に330ドル/トン台前半まで一時的に値を上げたものの、11月2日にロシアが合意への復帰を表明したことで290ドル/トン台前半に値を下げた。その後、一時、ポーランドへのミサイル着弾による政治的緊張から300ドル/トン台半ばまで値を上げたものの、ウクライナからの穀物輸出再開に関する4者合意の120日間(2023年3月19日まで)の延長決定、ドル高等から値を下げ、11月下旬現在、290ドル/トン台前半で推移。

とうもろこしは、10月末、270ドル/トン台前半で推移。10月29日にロシアがウクライナ産の黒海経由での輸出合意を無期限で停止すると一方的に表明したことにより、11月当初に270ドル/トン半ばまで一時的に値を上げたものの、11月2日にロシアが合意への復帰を表明したことで値を下げた。その後も、米国の収穫の進展、ミシシッピ川の水位低下による米国産の輸出競争力低下、ウクライナからの穀物輸出再開に関する4者合意の120日間の延長決定、世界的な景気減速懸念等から、値を下げ、11月下旬現在、260ドル/トン前後で推移。

コメは、10月末、440ドル/トン前後で推移。11月に入り、急速なパーツ高や、ベトナム産米よりタイ産米が低価格のため需要が増大していること等により値を上げ、11月下旬現在、450ドル/トン台後半で推移。

大豆は、10月末、510ドル/トン台後半で推移。11月当初、ブラジル大統領選の結果を受けたトラック運転手等の道路封鎖を受けて、520ドル/トン台後半まで値を上げた。その後、米国の期末在庫は低水準であるものの、収穫の進展、ミシシッピ川の水位低下による米国産の輸出競争力低下、世界的な景気減速懸念等から値が小幅に上下し、11月下旬現在、520ドル/トン台後半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場(期近物)、米はタイ国家貿易委員会価格

III 2022/23年度の穀物需給(予測)のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月予測から60万トン下方修正され27.5億トン。消費量は、前月予測から150万トン上方修正され27.8億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫率は前年度を下回り27.5%となる見込み(資料2参照)。

生産量は、前月予測から、小麦で上方修正、とうもろこし、コメで下方修正され、穀物全体で下方修正され、27.5億トンの見込み。

消費量は、前月予測から、小麦、とうもろこしで上方修正、コメで下方修正され、穀物全体で下方修正され、27.8億トンの見込み。

貿易量は、前月予測から、小麦で上方修正、とうもろこし、コメで下方修正され、4.9億トンの見込み。

期末在庫量は、7.6億トンと前月予測から下方修正、期末在庫率は、前月予測から下方修正された。

(注：数値は11月のUSDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

IV 2022/23年度の油糧種子需給(予測)のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り6.5億トン。消費量は前年度を上回り6.3億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫率は前年度を上回り、19.3%となる見込み。

(注：数値は11月のUSDA「Oilseeds: World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報：今後の世界の生産・貿易動向を左右するブラジル

本年は世界各国で干ばつや洪水などが発生しており、南米ではラニーニャ現象の影響が懸念材料となっている。また、ウクライナ情勢が不透明な中、米国のとうもろこし、大豆が前年度より減産見通しで、ブラジルへの需要の集中が見込まれている。

このことから、世界及びブラジルの生産・貿易動向についてまとめた。なお、ブラジルの大豆、とうもろこしの生産量については、史上最高と見込まれている。

注：文中の「2022/23年度」等は穀物年度で、ブラジルのとうもろこしは2023年3月から2024年2月。国や作物によって異なる(品目別需給編P.27参照)。

I. 世界の生産・貿易動向

1 大豆

世界の生産量は前年度を上回る見通しであるものの、主要生産国の米国は減産見通しである。今後の世界の生産・貿易動向は、2022/23年度の夏作が作付け期から初期生育期を迎えている南米次第である。南米では、現時点では作付面積の増加による大幅な増産が期待されている。

しかし、ラニーニャ現象が継続している中、アルゼンチンやブラジルのマット・グロッソ州等の主産地では、11月前半は降雨が少なく、土壌水分量は平年を下回る状況となっており、今後の生育状況が注目されることである。

2 とうもろこし

世界の生産量は前年度を下回る見通しとなっている。主要輸出国では、小麦と同様に、ロシアの侵攻によるウクライナで減産(3,150万トン：以下USDA11月見通し)、米国でも中西部の高温乾燥で減産見通しとなっている。輸入国側では、EUが夏季の干ばつにより、対前年比20%以上減産(同5,480万トン)となる見通しである。

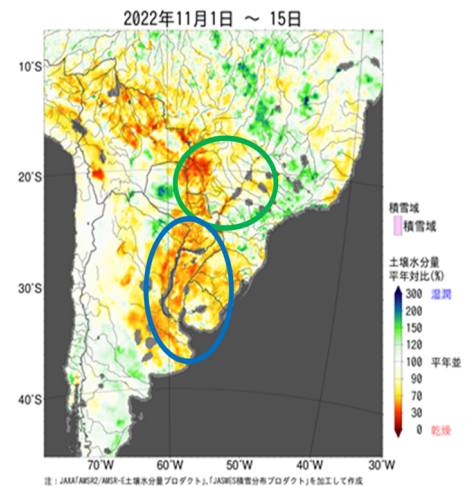
このため、今後のウクライナの輸出状況(詳細は、P.7【参考】を参照)にもよるが、2021/22年度の冬作が豊作で、史上最高の生産見通しとなっているブラジル産に各国からの需要が集中するとみられる。特に、年末以降輸入を開始するとみられる中国の動向が注目される。

3 小麦

世界の生産量は前年度を上回る見通しとなっている。

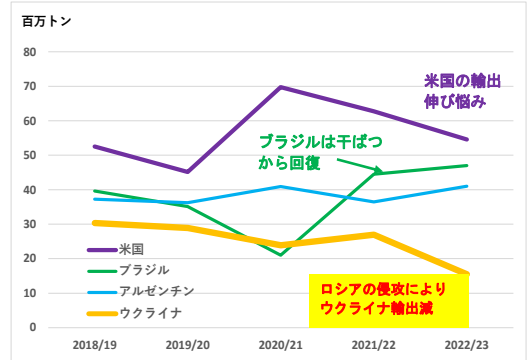
主要輸出国では、ロシアの侵攻を受け減産見通し(同2,050万トン)となっているウクライナを除き、ロシアは史上最高の生産見通し、カナダでは生産量は3,500万トンで、干ばつであった前年度を大きく上回り、過去5年平均を上回る見通し。また、豪州の生産量は3,450万トンと、3年連続

図1 南米の土壌水分量の平年対比(JASMAIデータ) 11月前半のブラジル・マットグロッソ州(緑○)からアルゼンチン(青○)にかけ土壌水分量が平年より少ない。



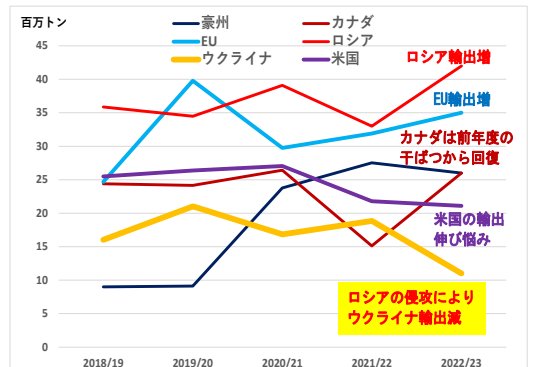
資料：農林水産省「農業気象情報衛星モニタリングシステム」
<https://jasmai.maff.go.jp/>

図2 主要とうもろこし輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2022.11)

図3 主要小麦輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2022.11)

豊作見通しとなっている。米国産は、輸出価格が高いため輸出競争力として劣るとみられる。

II. ブラジルの生産・貿易動向

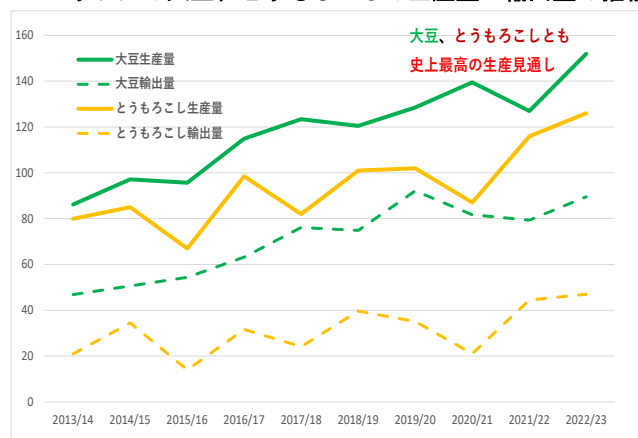
1 大豆

(1) 生産見通し

3億トンを超えるブラジルの穀物・油糧種子生産のうち、約5割を占める大豆の作付けは、降雨に恵まれ順調に進展し、11月に入り最大の生産州のマット・グロッソ州でほぼ終了し、その他の主産地でも作付け終盤に入った。

CONAB（ブラジル食料供給公社）の11月見通しによれば、作付面積・単収・生産量とも史上最高で、生産量は1億5,350万トンと見込まれている。作付面積が増加した要因には今年に入ってから大豆相場の高騰が背景にあるとみられる。

図4 ブラジルの大豆、とうもろこしの生産量・輸出量の推移



出典：米国農務省 「PS&D」 (2022. 11)

(2) 輸出見通し

大豆の輸出に関しては、USDAの11月見通しによれば、過去最高の2019/20年度（9,210万トン）に次ぐ8,950万トンと見込まれている。輸出量増加の背景として、史上最高の生産見通しに加え、米国の生産量・輸出量が前年度に比べ減少する見通しとなったこと、中国の経済成長が鈍化しているとはいえ、ブラジル産の輸入が前年度より増加することが要因とみられる。

10月末に実施されたブラジル大統領選で、現職のボルソナーロ大統領の敗北を受けて、支持層のトラック運転手による高速道路封鎖などの抗議活動が行われたが、11月下旬現在、沈静化しており、農産物輸出への支障はないとみられる。

2 とうもろこし

(1) 生産見通し

穀物・油糧種子生産のうち、約4割を占めるとうもろこしについては、9月以降、大豆と同時期に作付けが行われる夏とうもろこし（全体の約2割強）と、大豆の収穫後に作付けされる冬とうもろこし（サフリーニャ：全体の約8割弱）に大別されるが、近年の大豆の増産に伴い、冬とうもろこしの生産量が大きく増加している。

夏とうもろこしの作付けは南部のパラナ州などでおおむね順調に進展しており、CONABの11月見通しによれば、2,820万トンとなっている。冬作については、作付けは来年となるが、穀物価格の高騰の影響を受け、作付面積が増加するとみられ、豊作となった2021/22年度（8,780万トン）をさらに更新する9,820万トンが見込まれている。現時点の見通しであるが、合計で1億2,640万トンと史上最高を更新する見通しである。

(2) 輸出見通し

とうもろこしの輸出に関しては、2022/23年度の米国の減産見通しやロシアのウクライナ侵攻など他の輸出国の輸出量が減少していることから、2021/22年度の冬とうもろこしについて輸出量が大きく増加していた。さらに、USDAの11月見通しによれば、2022/23年度の輸出量も史上最高の4,700万トンが見込まれている。これは、史上最高の生産見通しに加え、米国

の生産量・輸出量が前年度と比べて減少する見通しとなったことや、ロシアの侵攻によりウクライナ産の輸出が不透明なことが要因とみられる。

中国が従前ほとんど輸入していなかったブラジル産とうもろこしに関し、本年5月に検疫条件などで合意しており、報道等によると、中国海関（税関）が11月上旬に、ブラジル産とうもろこし輸出業者リストを更新したとされている。早ければ、本年末にも対中国向け輸出が開始されるとみられている。

※報道によれば、11月23日付けでブラジル産とうもろこしの中国向け輸出が開始された模様。

3 小麦

ブラジルは、小麦の主産国ではなく、年間消費量の1,200万トンのうち、不足分である通常約600万トン程度を隣国アルゼンチンから輸入している。しかし、ブエノスアイレス穀物取引所によると、アルゼンチンの小麦生産見通しについて、乾燥・霜害の影響により1,240万トンと前年度から大きく減少する見通しのため、ブラジルは米国、カナダ、ロシアなどメルコスール以外の国々から輸入する動きをみせている。

2021/22年度では、ブラジルはメルコスール以外の国々から約15.5万トンの小麦を輸入したが、本年は100万トンに達する可能性がある。しかしながら、世界の小麦貿易に与える影響は小さいと見られる。

【参考】ウクライナの黒海からの穀物輸出に関する4者合意の延長

10月8日に、ロシア本土とロシア占領下のクリミア半島を結ぶクリミア橋の爆破事件が発生し、その後、ロシア側のウクライナ国内へのミサイル等による反撃があり、ウクライナ、ロシアの穀物輸出への影響が懸念された。しかし、10月下旬現在、小麦や大豆を中心とした穀物相場は、ドル高や米国の収穫進展などから9月下旬時点と比較して下落し、11月21日には小麦の相場は8ドルを下回った。

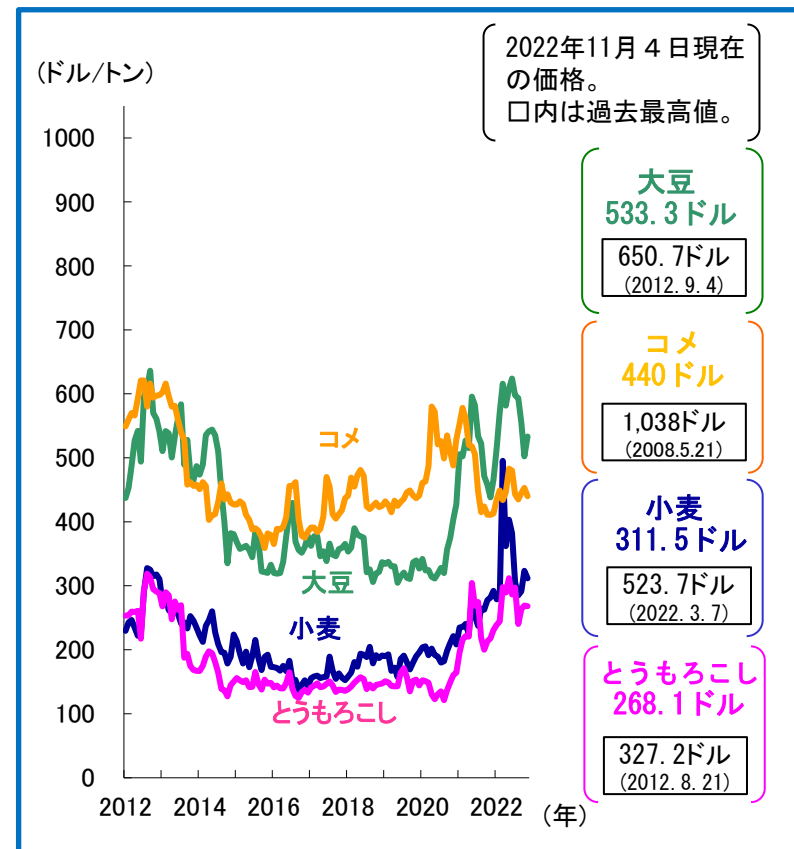
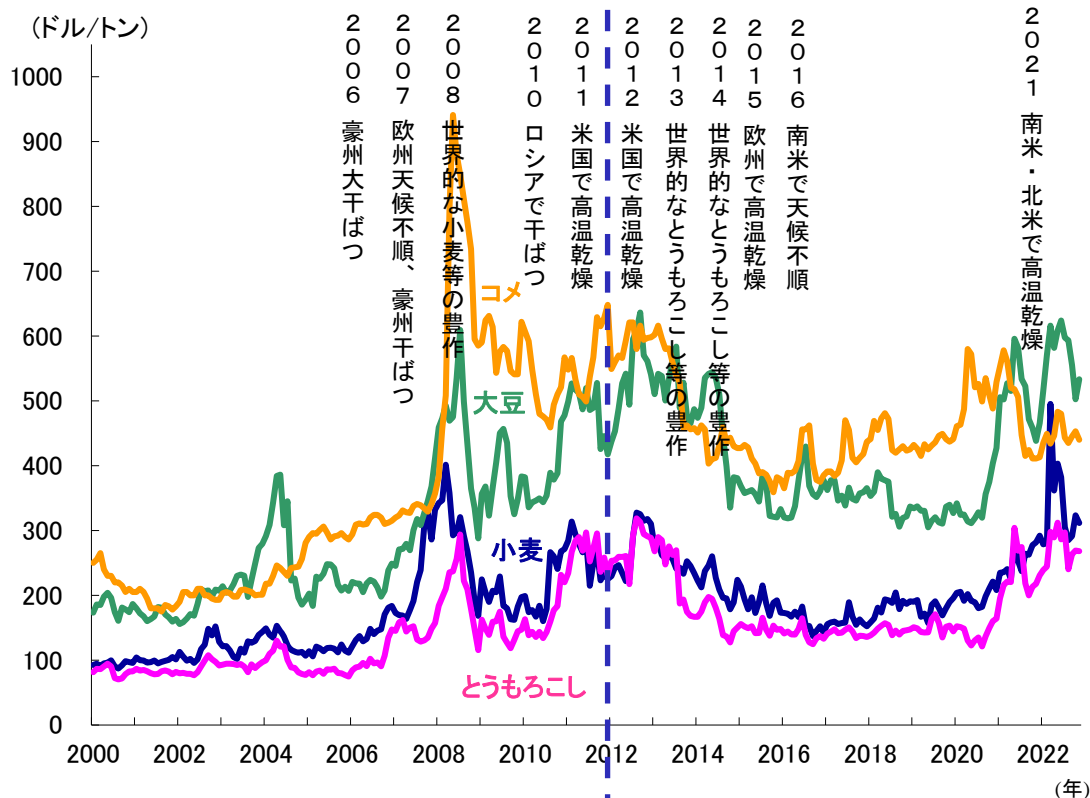
一方、ウクライナの黒海からの穀物輸出に関する4者合意については、10月29日にロシアがウクライナ産の黒海経由での輸出合意を無期限で停止すると一方的に表明したものの、穀物輸出回廊を利用しての攻撃は行わないとのウクライナ側の回答を受け、ロシアは11月2日には復帰すると表明した。

結果として、11月19日で120日間の期限を迎える4者合意について、国連は、11月17日、更に120日間の延長（2023年3月19日まで）に合意したと公表した。国連によれば、ウクライナ産穀物等の輸出に加え、ロシアからの食料・肥料輸出に対する障壁を取り除くことについてコミットしているとのことである。

資料 1 穀物等の国際価格の動向 (ドル/トン)

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年に入り、ウクライナ情勢が緊迫化する中、小麦は史上最高値を更新。コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



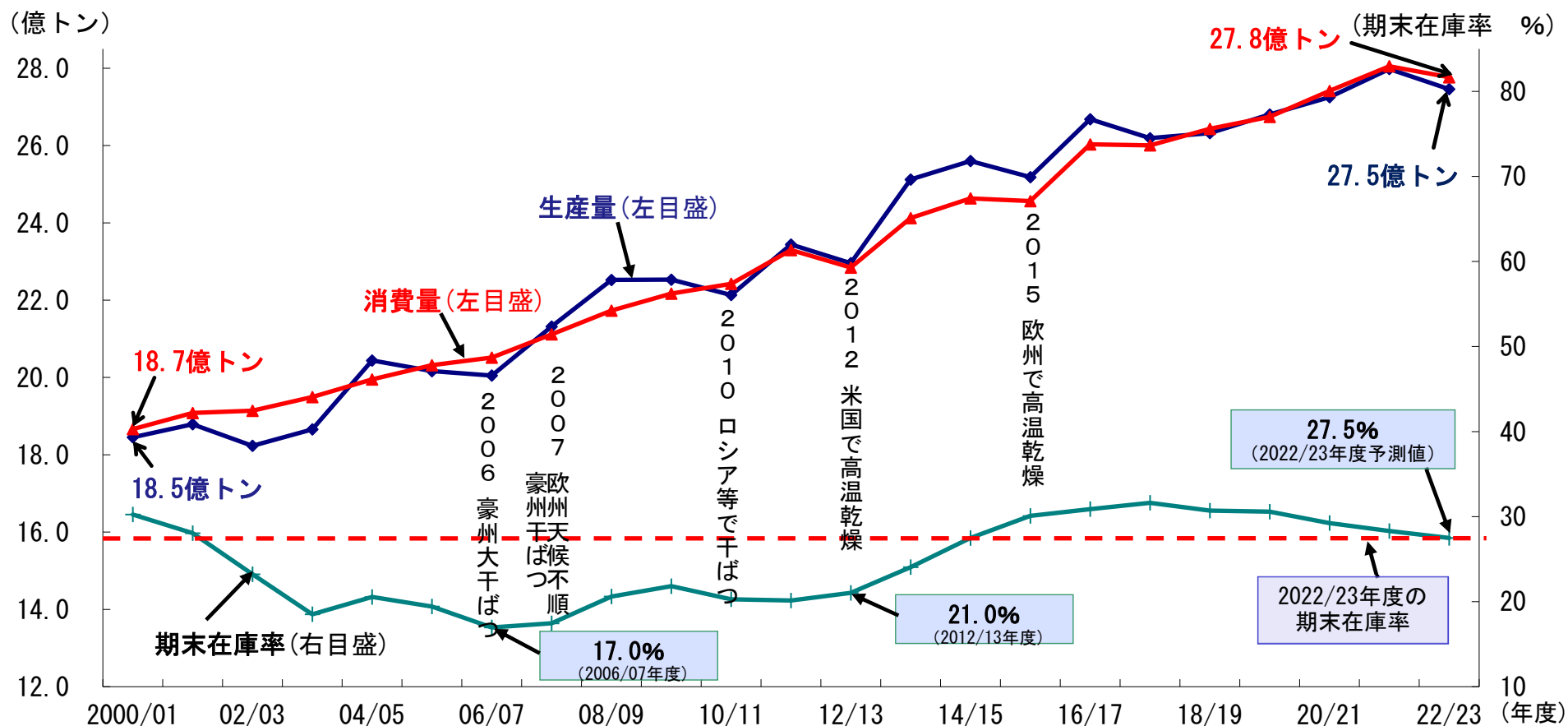
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格(セツルメント)である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2022/23年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2022/23年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、27.5%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

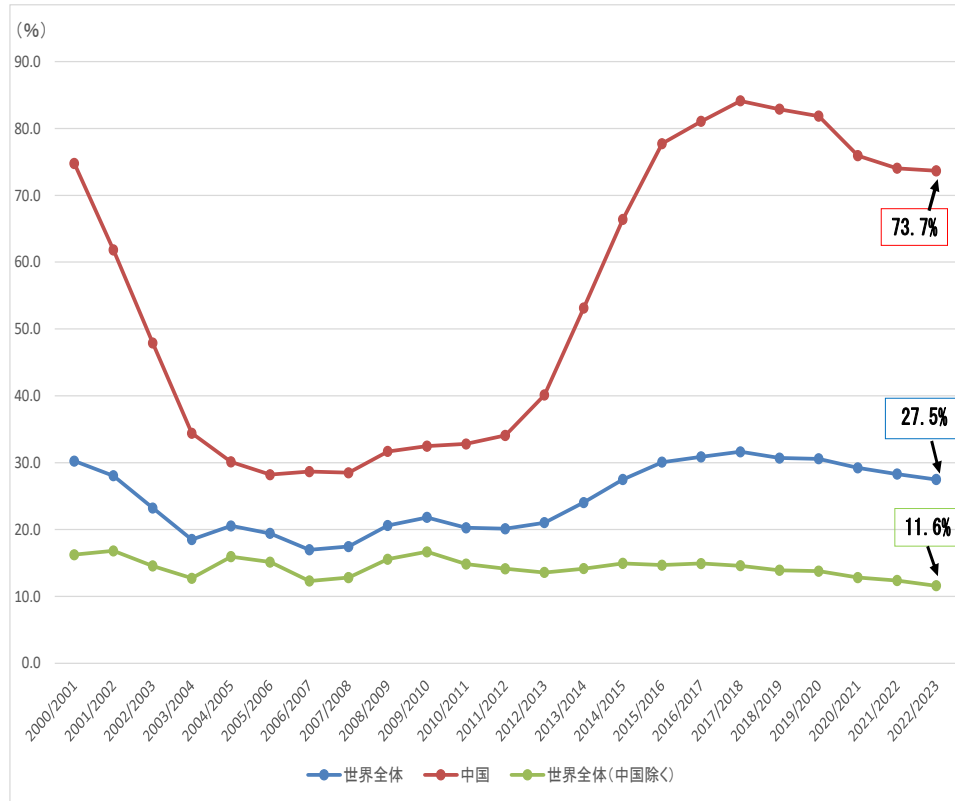


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(November 2022)、「PS&D」

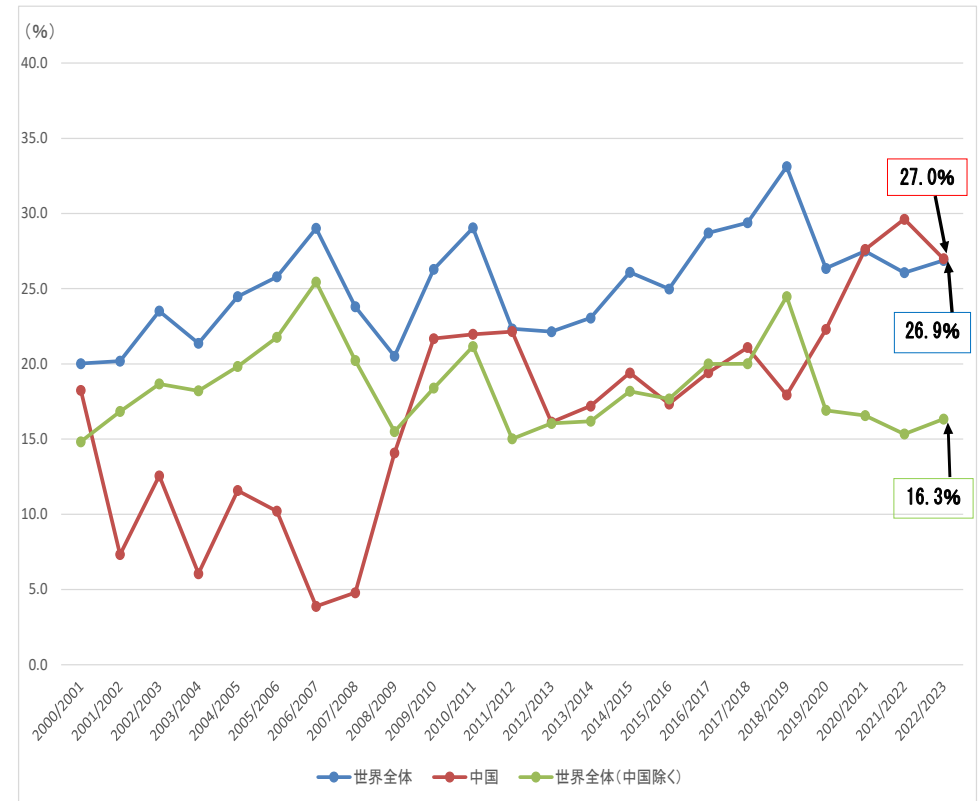
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料：米国農務省「PS&D」(November 9, 2022)

注：1)穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

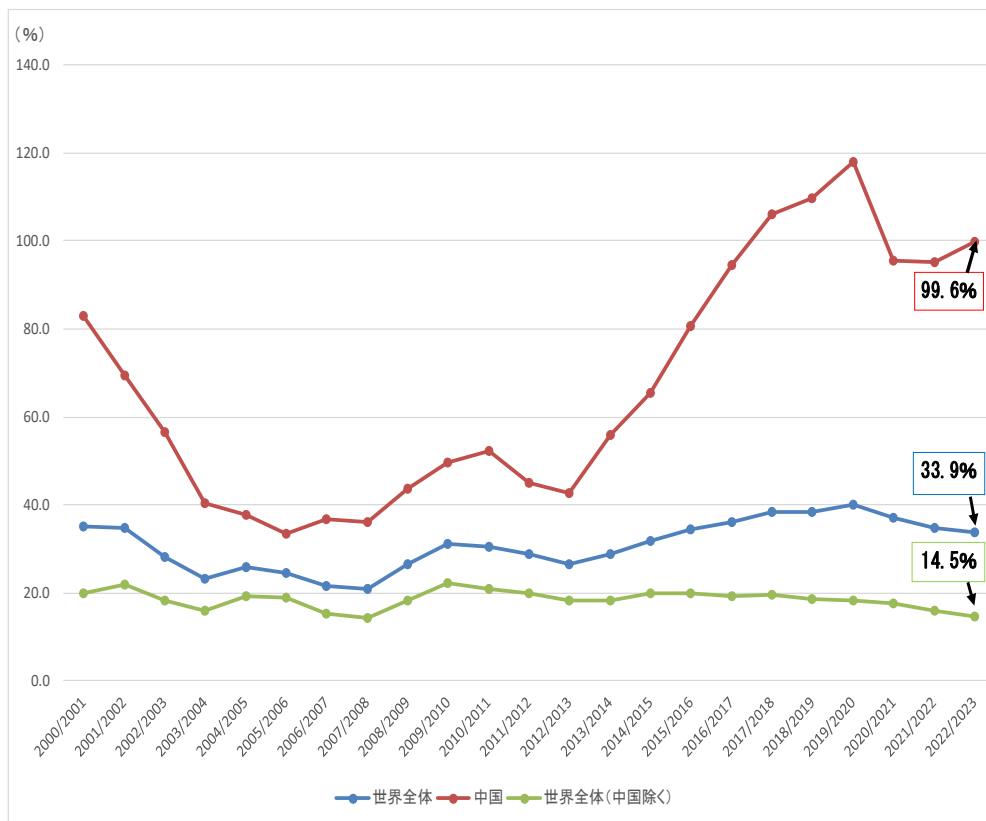
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/消費量×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

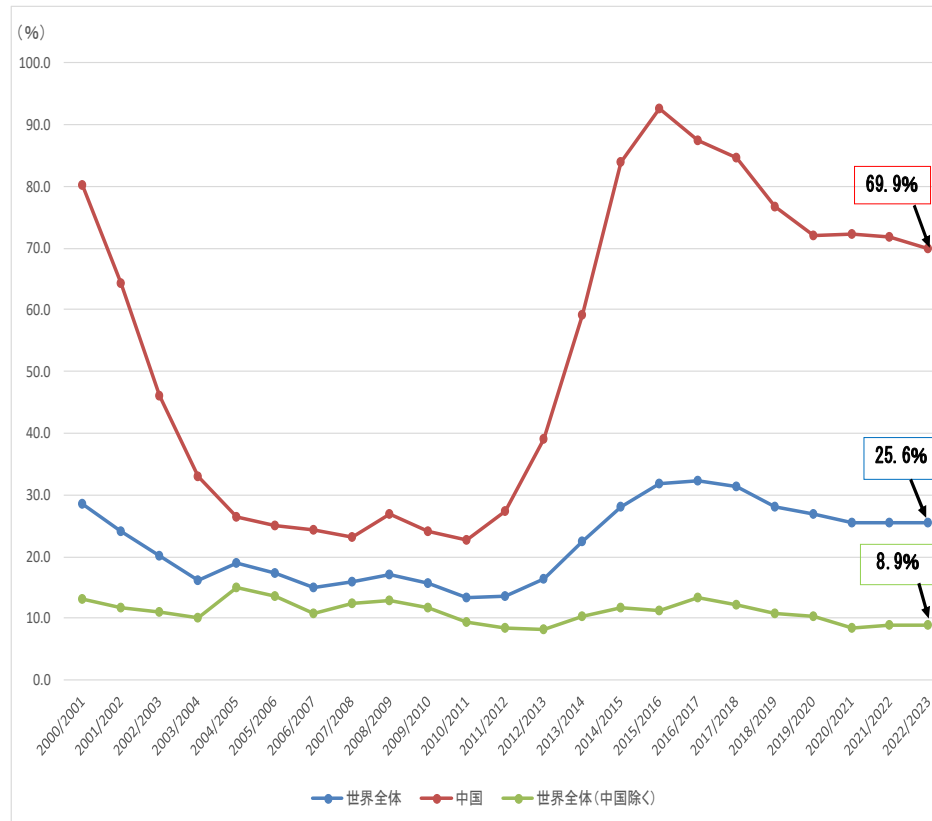
4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料：米国農務省「PS&D」(November 9, 2022)

注：1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

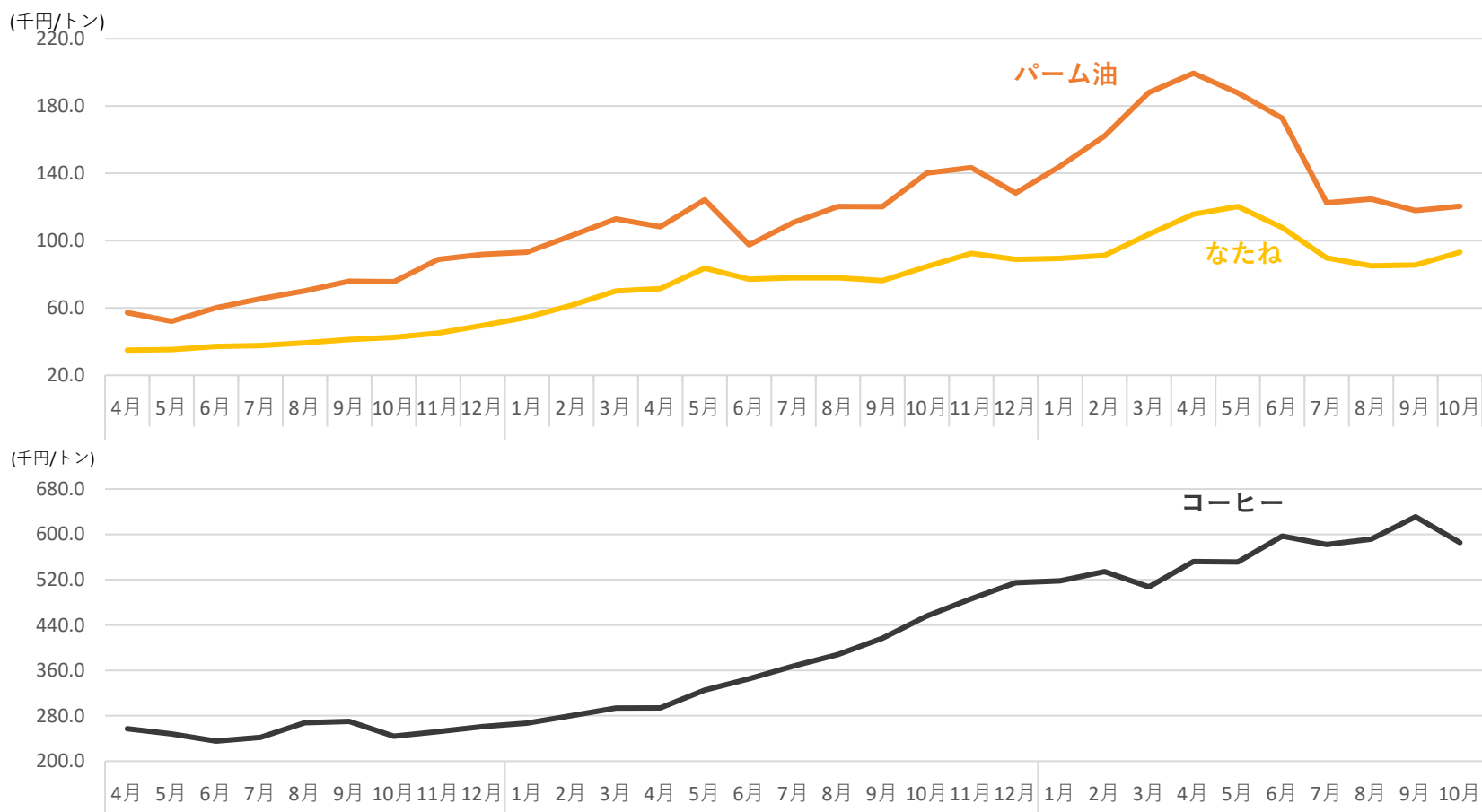
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料4-1 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加、ウクライナ情勢の影響などが価格に影響を及ぼしている。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダで減産があったものの、作付・生育状況が良好であり、平年並みの収量が見込まれている。パーム油については、インドネシアの輸出禁止措置の解除（5月23日）やマレーシアの生産量の増加予測が価格に影響を及ぼしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことが価格に影響を及ぼしている。



2022年11月20日現在
□内は2020年4月以降
の最高値。

パーム油
120.4千円/トン
199.5千円/トン
(2022.4)

なたね
93.1千円/トン
120.3千円/トン
(2022.5)

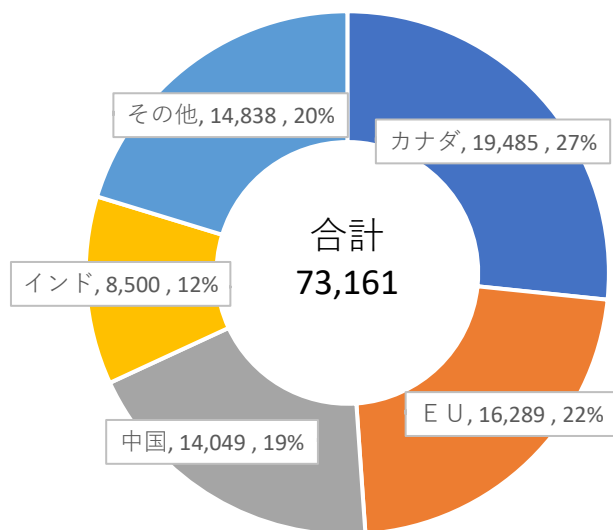
コーヒー
585.4千円/トン
631.1千円/トン
(2022.9)

※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料 4 - 2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

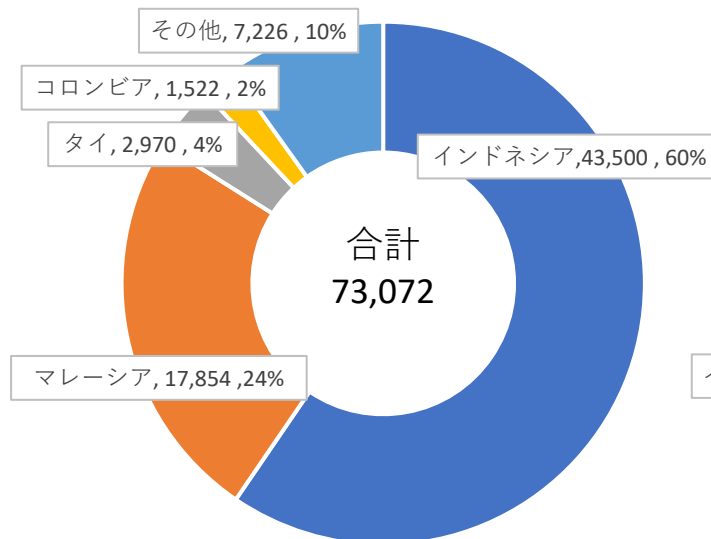
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2020/21）
（単位：千トン）



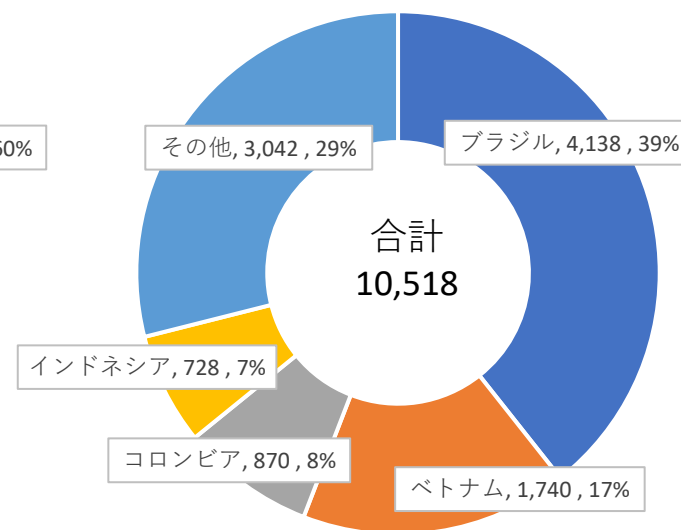
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2021年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	2,124	90.7%
オーストラリア	218	9.3%
その他	0	0.0%
合計	2,342	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	418	65.4%
インドネシア	220	34.5%
その他	0	0.0%
合計	638	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	146	36.4%
ベトナム	100	25.0%
コロンビア	48	11.9%
その他	108	26.7%
合計	402	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料 4 - 3 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2020年										2021年										2022年										
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6	85.0	85.5	93.1
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3	94.8	100.6	108.9
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1	109.1	112.3	110.1

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2020年										2021年										2022年										
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4	124.7	117.9	120.4
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9	101.9	94.5	102.1
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5	103.7	98.1	85.9

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4 - 4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年												2021年												2022年									
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月			
コー ヒー	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6	631.1	585.4			
前月比	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6	106.7	92.8			
前年同 月比	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4	151.4	128.4			

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和4年10月の国内の加工食品の消費者物価指数は98.8～160.2(前年同月比で-1.1%～35.6%)の範囲内。

消費者物価指数(総務省)
(令和4年5月～令和4年10月)

品目	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4						上昇率 (前年 同月比)
	平均	平均	平均	平均	平均	5月	6月	7月	8月	9月	10月	
食パン	99.6	100.2	101.1	100.0	99.2	107.5	107.9	111.9	114.4	113.8	113.7	14.2%
即席めん	95.7	95.3	98.5	100.0	100.1	100.1	110.0	113.7	114.9	112.4	112.3	11.3%
豆腐	98.6	98.8	99.1	100.0	101.3	104.0	104.7	104.9	105.1	106.7	108.3	6.2%
食用油 (キャノーラ油)	102.7	101.5	100.9	100.0	106.9	135.4	139.2	145.8	150.4	156.8	160.2	35.6%
みそ	96.9	97.4	99.1	100.0	99.3	101.0	99.8	99.9	100.1	103.4	103.6	4.4%
マヨネーズ	102.3	100.8	100.7	100.0	105.6	126.1	125.0	125.2	126.5	127.0	133.7	19.0%
チーズ	97.3	100.9	101.3	100.0	98.7	105.3	104.0	106.2	106.6	113.2	117.1	19.0%
バター	99.3	99.5	99.9	100.0	99.9	99.5	99.3	99.1	99.4	98.7	98.8	-1.1%
生鮮食品を 除く食料	97.0	97.9	99.0	100.0	100.2	102.6	103.2	103.8	104.2	105.0	106.7	5.9%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】

食品価格動向調査(農林水産省)
(令和4年5月～令和4年11月)

品目	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4						11月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
	平均	平均	平均	平均	平均	5月	6月	7月	8月	9月	10月			
食パン	97.6	97.9	101.3	100.0	98.6	104.6	105.9	109.8	111.1	110.7	110.9	111.3	0.4%	13.3%
即席めん	92.6	92.4	97.9	100.0	99.2	99.0	110.0	111.2	111.2	110.0	110.0	110.6	0.5%	11.7%
豆腐	100.8	100.1	100.9	100.0	100.6	102.4	102.9	103.3	103.7	104.2	107.2	107.2	0.0%	6.0%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	97.9	103.5	100.0	104.1	130.8	132.7	139.1	148.3	156.8	160.6	161.2	0.4%	39.8%
みそ	91.9	96.6	100.4	100.0	99.2	99.6	98.8	99.8	100.4	101.7	102.5	102.7	0.2%	3.9%
マヨネーズ	99.1	97.9	103.1	100.0	102.2	117.2	118.3	117.2	118.3	116.9	126.2	128.9	2.1%	20.9%
チーズ	95.2	98.6	100.9	100.0	98.1	104.5	105.0	105.0	104.5	108.0	114.4	115.4	0.9%	23.3%
バター	98.8	99.0	99.5	100.0	99.8	99.3	99.3	99.0	99.3	98.6	98.6	98.6	0.0%	-1.1%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

- 独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）
- 2022年12月号（11月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）アジアからの需要増が牛肉輸出をけん引

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002489.html

（カナダ）総飼養頭数、干ばつなどを要因に減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002490.html

（EU）牛肉供給量の減少と価格の高騰により輸出量は減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002491.html

（豪州）労働力不足や牛群再構築により牛肉輸出量は減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002492.html

◆豚肉

（米国）22年8月の豚肉輸出量、日本向けが大幅に減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002503.html

（中国）需要期を迎え、豚肉価格は上昇傾向継続の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002504.html

資料6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（EU）生乳取引価格は20カ月連続で前月を上回るも乳製品価格は下降基調

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002493.html

（豪州）生乳生産量、引き続き前年割れで推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002505.html

（NZ）GDT価格、全粉乳を除く主要3品目で今年最安値を記録

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002506.html

（アルゼンチン）生乳生産量は前年同期をわずかに上回る水準で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002507.html

◆飼料穀物

（世界）22/23年度の世界のトウモロコシ、期末在庫は前年度比微減見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002494.html

（世界）米国の下方修正も、南米での増産見込から期末在庫は上方修正

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002508.html

（米国）22/23年度の米国トウモロコシ、在庫率は10%を割り込む見込み

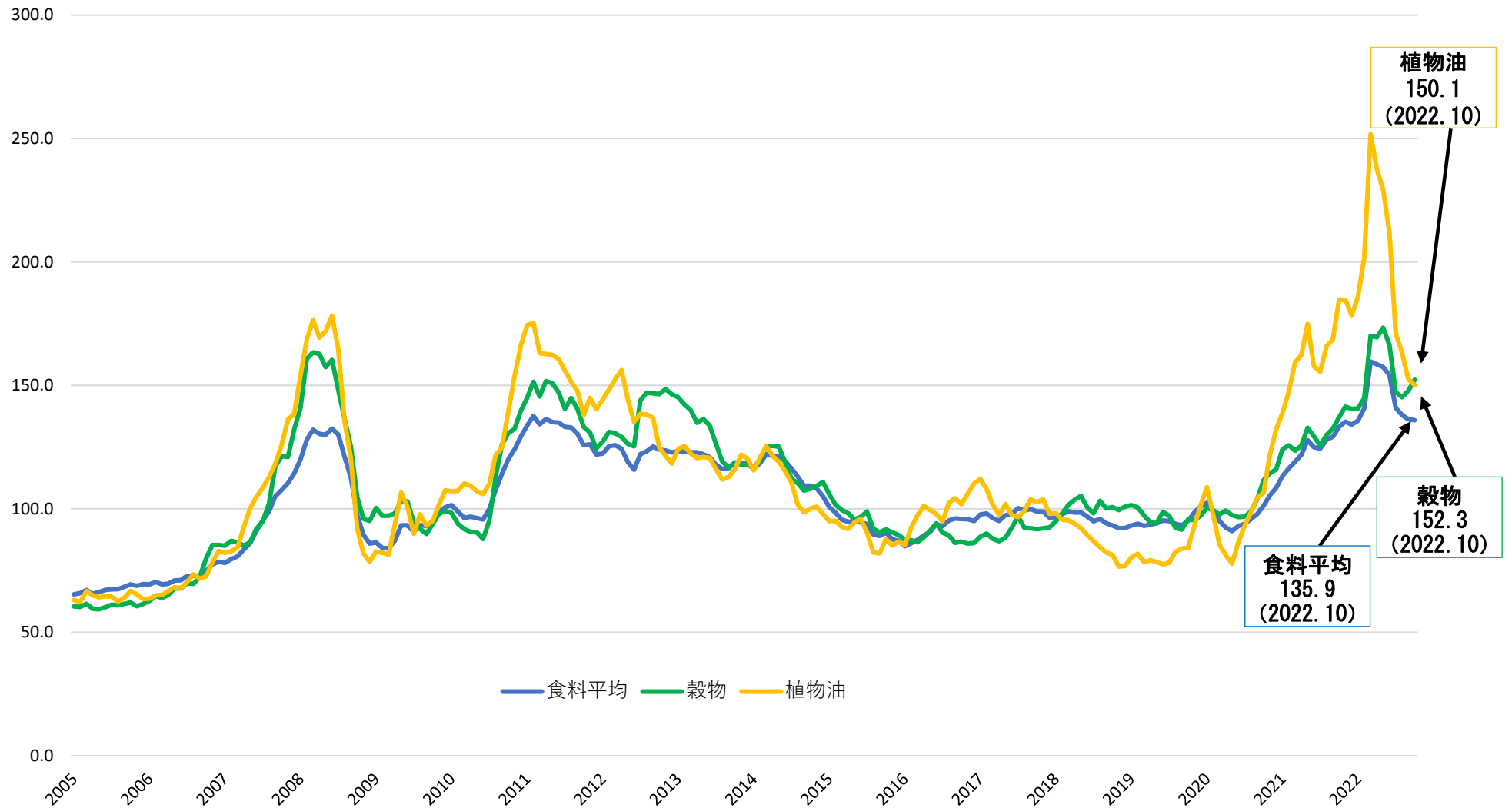
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002509.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002510.html

資料7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料:FAO「Food Price Index」(2022.11)より作成

注:穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等